

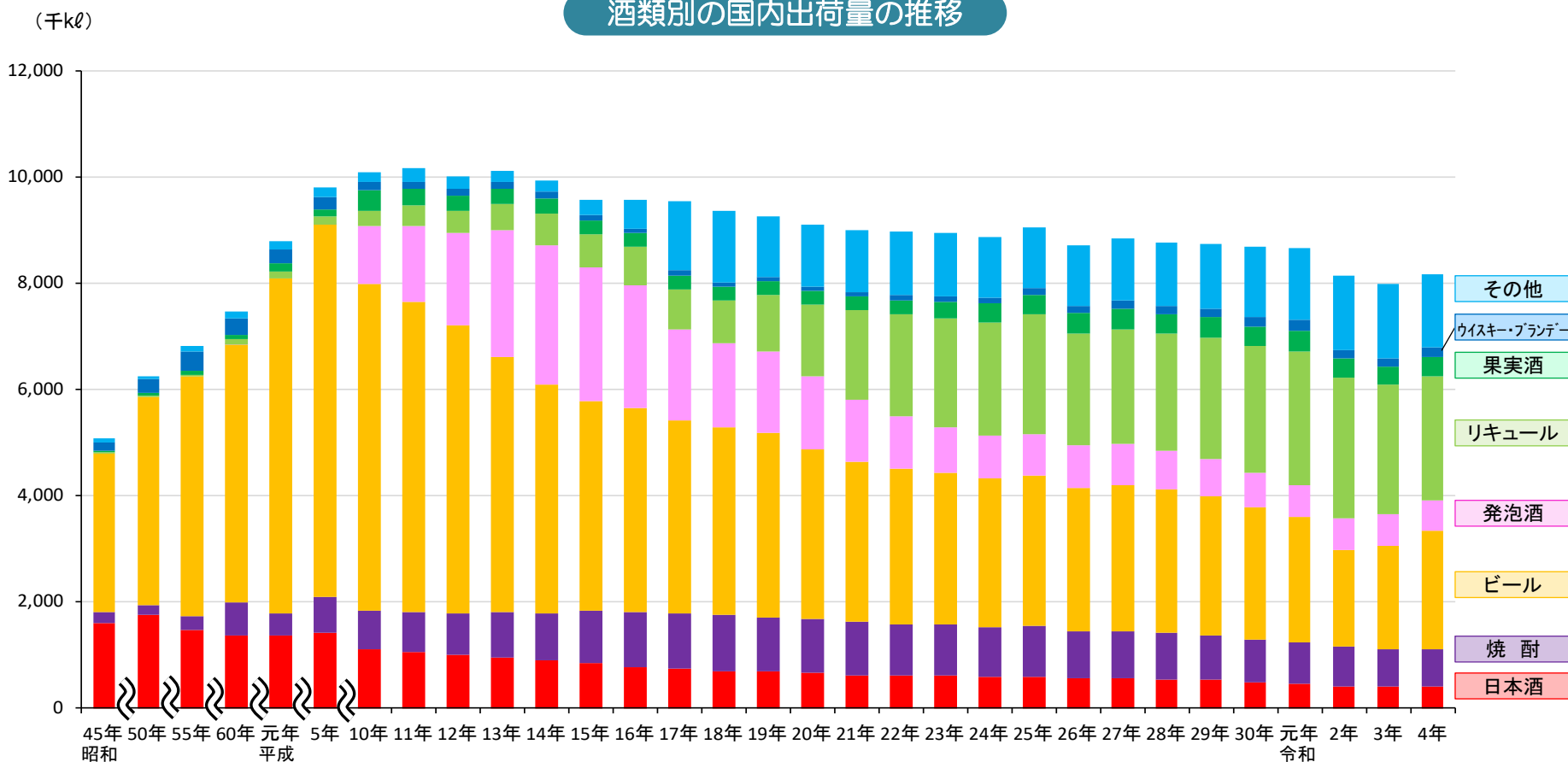
日本酒をめぐる状況

令和7年5月
農林水産省
農 産 局

1 酒類別の国内出荷量の推移

- アルコール飲料全体の国内出荷量は、消費者志向の変化等により、酒類間での移動を伴いながら、全体ではやや減少傾向で推移。令和4年度では816万kℓ。
- 長期的な傾向を見ると、日本酒、焼酎、ビールなどが減少する一方で、チューハイなどのリキュールなどが増加。

酒類別の国内出荷量の推移

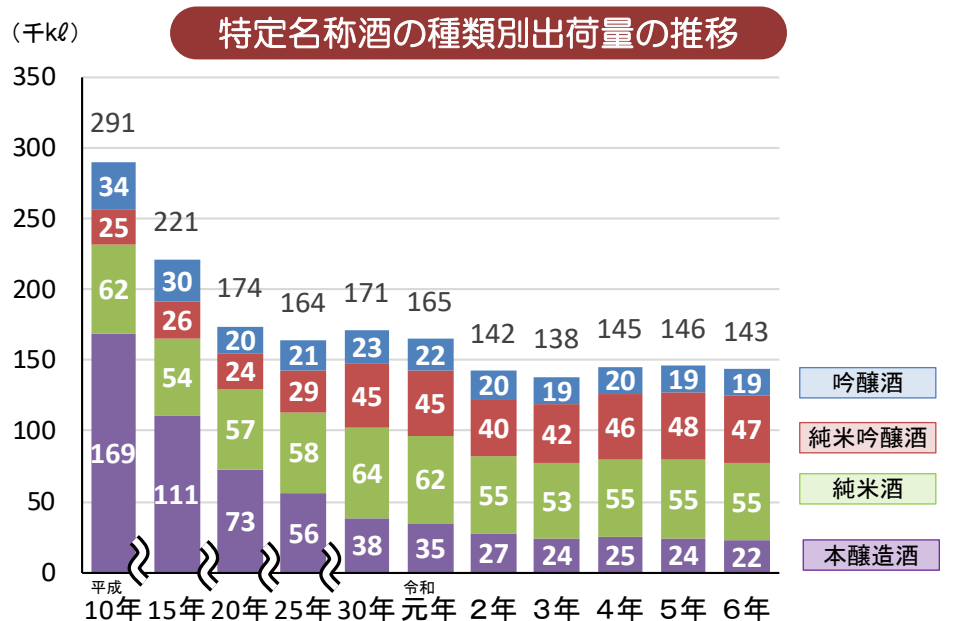
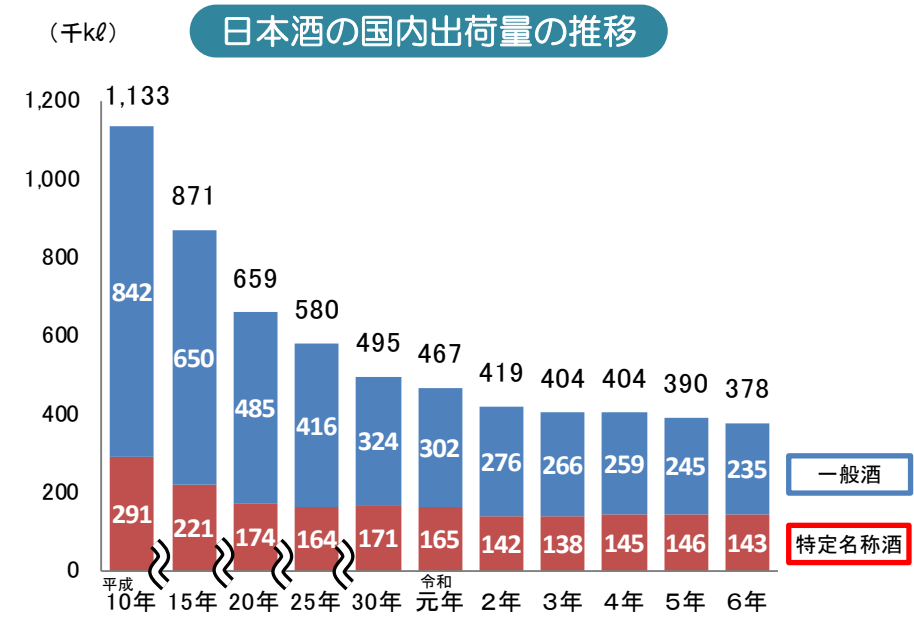


資料：「国税庁統計年報」（国税庁）。年は会計年度。

注：出荷数量は酒類課税数量。焼酎は連続式蒸留焼酎及び単式蒸留焼酎の合計。果実酒には甘味果実酒を含む。その他は合成清酒、みりん、スピリッツ、その他醸造酒等の合計。

2 日本酒の国内出荷の状況

- 日本酒の国内出荷量は、ピーク時（昭和48年）には170万kℓを超えていたが、他のアルコール飲料との競合などにより減少傾向で推移し、令和6年は約38万kℓまで減少。
- 令和6年の国内出荷量は、特定名称酒が対前年比▲2%、一般酒が対前年比▲4%と減少し、日本酒全体としても、対前年比▲3%と減少。



資料：日本酒造組合中央会調べ。年は暦年。令和6年は概算値。石川県のデータが令和5年12月以降一部未集計。

注1：国内出荷量は、清酒課税移出数量。

2：日本酒は、一般酒のほか、原料、製造方法等の違いによって吟醸酒、純米酒、本醸造酒等に分類され、これらを総称して「特定名称酒」という。

3：ラウンドの関係で計と内訳が一致しない場合がある。

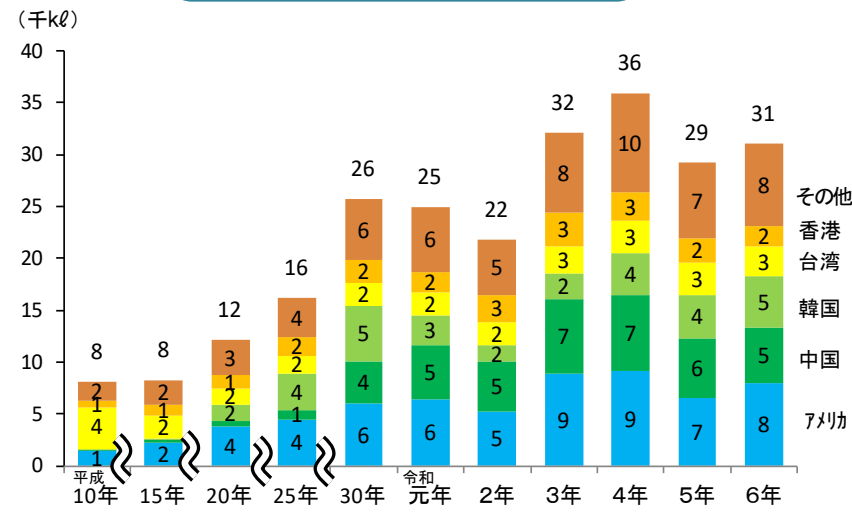
日本酒の国内出荷量に占める特定名称酒の割合

平成10年	15年	20年	25年	30年	令和元年	2年	3年	4年	5年	6年
26%	25%	26%	28%	34%	35%	34%	34%	36%	37%	38%

3 日本酒の輸出の状況

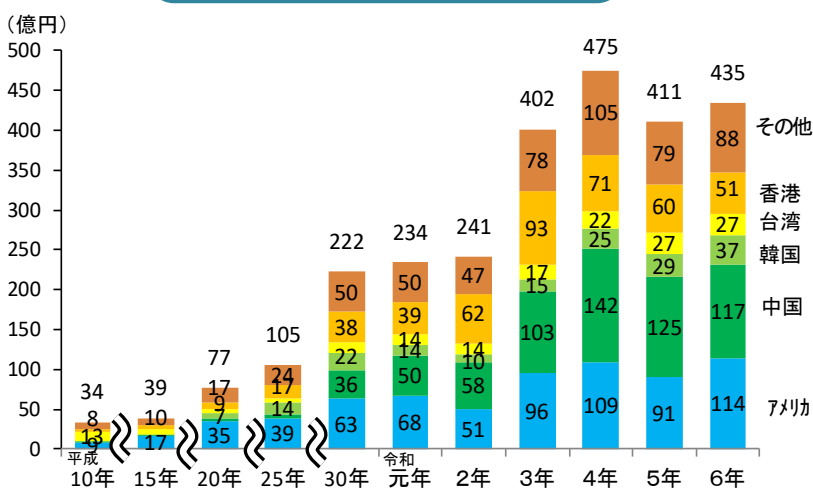
- 日本酒の国内出荷が減少傾向にある中、輸出量は、海外での日本食ブーム等を背景に増加傾向で推移。
- 令和6年の輸出量は、アメリカ、韓国等への輸出の増加により、対前年比+6%と回復。
- 令和6年における日本酒の輸出先国は80か国で、このうち、アメリカ、中国、韓国、台湾、香港の5か国・地域で数量及び金額の7割以上を占めている。

日本酒の輸出量の推移



資料：「貿易統計」（財務省）。年は暦年。
注：ラウンドの関係で計と内訳が一致しない場合がある。

日本酒の輸出金額の推移



資料：「貿易統計」（財務省）。年は暦年。
注：ラウンドの関係で計と内訳が一致しない場合がある。

日本酒の全出荷量に占める輸出量の割合

平成10年	15年	20年	25年	30年	令和元年	2年	3年	4年	5年	6年
0.7%	0.9%	1.8%	2.7%	4.9%	5.1%	4.9%	7.3%	8.2%	6.5%	7.6%

注：年は暦年。

輸出先国別平均輸出単価

(単位：円/ℓ)

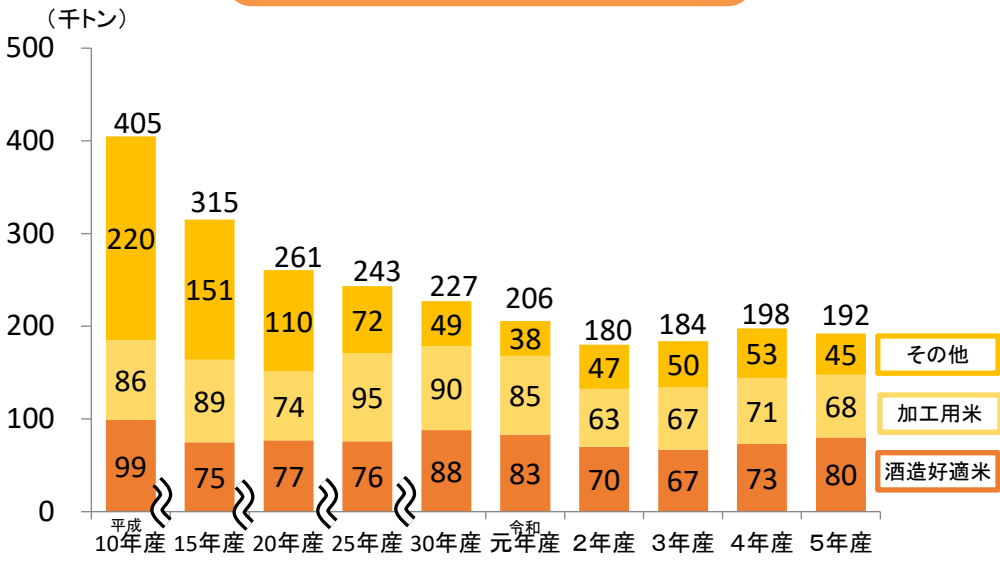
	全輸出先国	香港	中国	アメリカ	台湾	韓国
令和6年	1,399	2,539	2,193	1,430	924	765

資料：「貿易統計」（財務省）。年は暦年。

4 日本酒原料米の使用状況

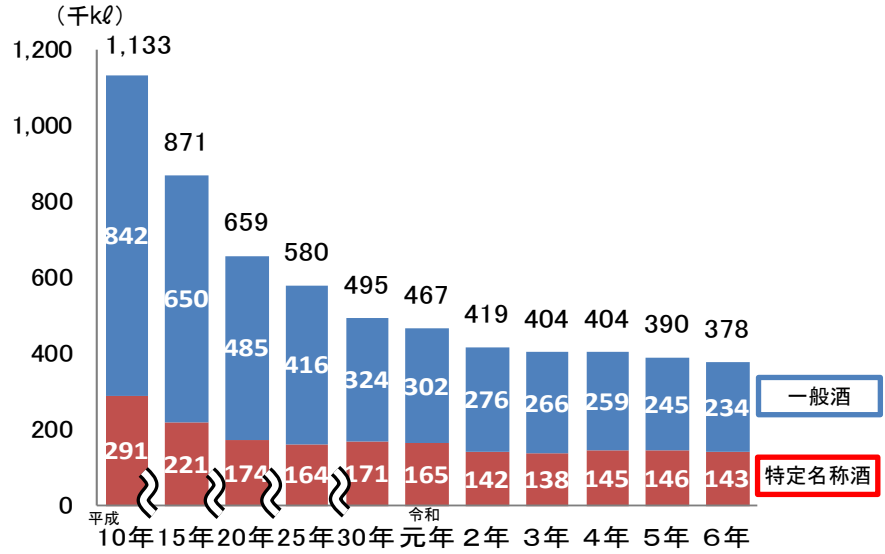
- 日本酒の原料米は、一般的に主食用としても流通している品種のほか、醸造用に適した品種である山田錦、五百万石などの「酒造好適米」が使用されており、酒造好適米については、主に契約栽培による取引が行われている。
- 日本酒原料米の使用量については、
 - ① 平成25～29年産は、高精白米を使用するため製品当たりの玄米使用量が多い特定名称酒の出荷が堅調に推移していたこと等により、24～25万トン程度で推移。
 - ② 平成30年産以降は、日本酒の国内出荷量が大幅に減少し、特定名称酒についても減少に転じたこと等から、18～23万トン程度で推移。
 - ③ 今後については、日本酒の国内出荷量の減少傾向が続いている一方、輸出による増加が期待されている。

日本酒原料米の使用状況



資料：農林水産省による推計値。

日本酒の国内出荷量の推移



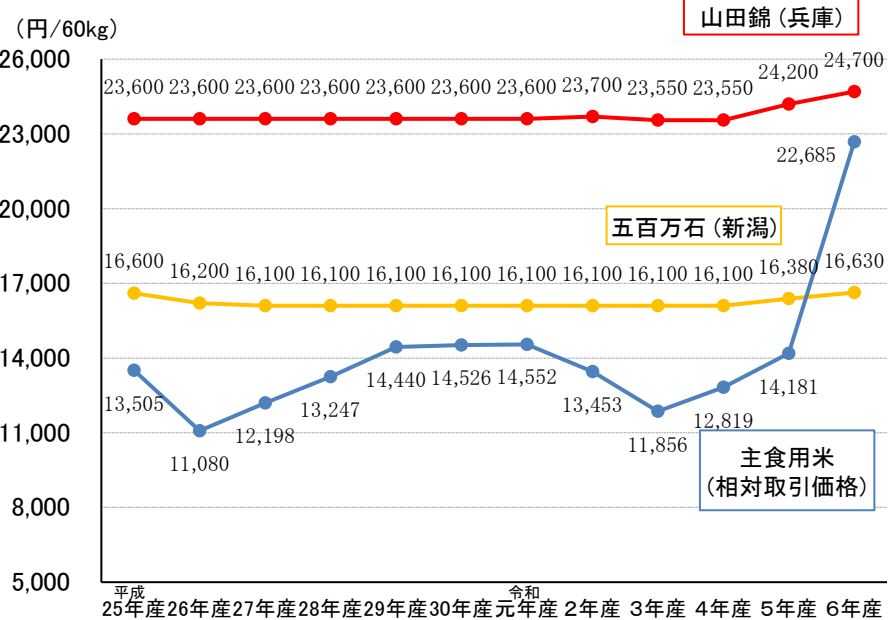
資料：日本酒造組合中央会調べ。年は暦年。令和5年12月分の石川県のデータが一部未集計。

注1：国内出荷量は、清酒課税移出数量。
注2：日本酒は、一般酒のほか、原料、製造方法等の違いによって吟醸酒、純米酒、本醸造酒等に分類され、これらを総称して「特定名称酒」という。
注3：ラウンドの関係で計と内訳が一致しない場合がある。

5 酒造好適米の価格・生産の状況

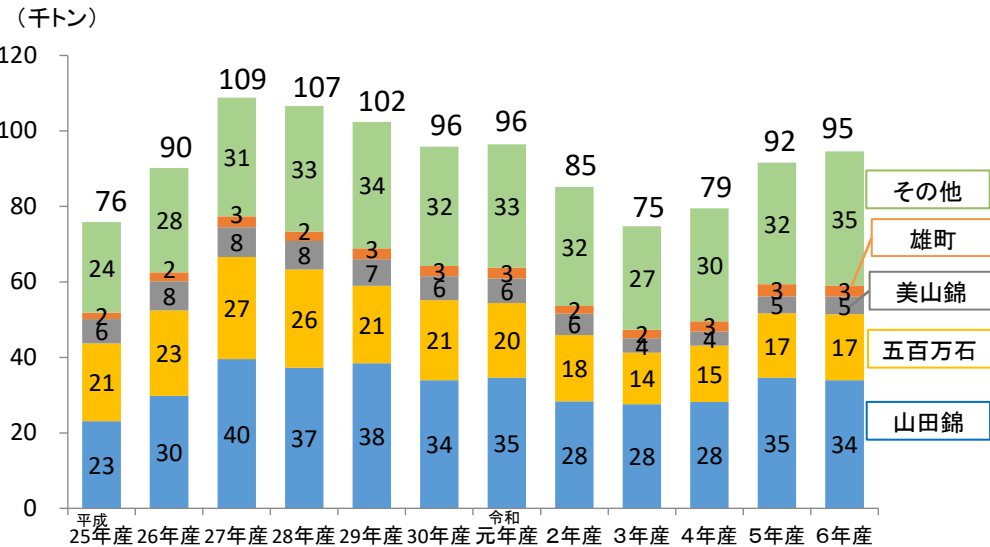
- 酒造好適米は、主食用品種に比べて栽培が難しく、収量が低いこと等から、取引価格は主食用米に比べて高値で取引されている。
- 酒造好適米の生産量は、作付面積が増加し、作柄が良かった平成27年産をピークに減少傾向で推移しており、令和2及び3年産は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響等により、日本酒の国内出荷量が急減したことから、生産抑制が行われ、生産量が大幅に減少。
- 令和5年産の生産量は、対前年+1.25万トン（+15%）の約9.2万トンと増加に転じ、さらに、令和6年産の生産量は、対前年+0.3万トン（+3%）の約9.5万トンと増加が見込まれる。

原料米の販売価格の推移



注1: 酒造好適米(日本酒造組合中央会からの聞き取り)は、1等米の販売価格
注2: 主食用米(相対取引価格)は、出回りから翌年10月までの1等米の通年平均価格(6年産は出回りから翌年3月までの速報値)であり、包装代、運賃を含み、消費税相当額を含まない。

酒造好適米の生産状況



資料：「農産物検査結果」(農林水産省)
注1：令和6年産は、令和7年3月31日現在の速報値を直近3カ年の3月31日現在の農産物検査の進捗率により確定値見合いに推計したもの。
注2：ラウンドの関係で計と内訳が一致しない場合がある。

6 酒造好適米の産地別・銘柄別生産状況

○ 令和6年産酒造好適米の生産量は約9.5万トンと見込まれ、このうち、産地別では、兵庫、新潟、岡山、長野、秋田の5県で約6割を占めており、銘柄別では、「山田錦」、「五百万石」の2銘柄で全生産量の5割以上を占めている。

酒造好適米の産地別生産量の推移

(単位:トン)

	令和 元年度	2年度	3年度	4年度	5年度	6年度	シェア
全国計	96,454	85,179	74,756	79,472	91,630	94,539	100%
兵庫	25,766	22,338	20,940	22,202	25,260	24,795	26%
新潟	12,000	11,223	8,855	10,409	11,508	11,221	12%
岡山	5,704	4,029	4,620	5,044	6,443	6,337	7%
長野	5,962	4,982	3,539	3,422	4,674	5,306	6%
秋田	5,010	4,613	3,964	3,667	3,927	4,309	5%
その他	42,012	37,995	32,838	34,727	39,819	42,572	45%

酒造好適米の銘柄別生産量の推移

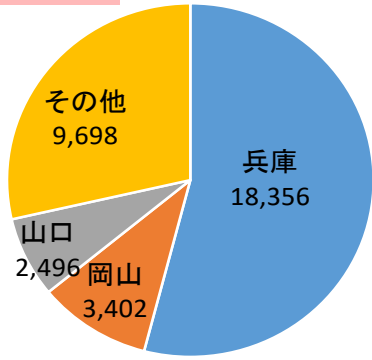
(単位:トン)

	令和 元年度	2年度	3年度	4年度	5年度	6年度	シェア
全国計	96,454	85,179	74,756	79,472	91,630	94,539	100%
山田錦	34,644	28,342	27,609	28,168	34,608	33,952	36%
五百万石	19,767	17,561	13,612	14,970	17,072	17,469	18%
美山錦	6,475	5,710	3,816	3,742	4,525	4,654	5%
雄町	2,932	1,987	2,289	2,677	3,142	2,965	3%
その他	32,636	31,578	27,429	29,915	32,283	35,500	38%

資料：「農産物検査結果」（農林水産省）
注1：令和6年産は、令和7年3月31日現在の速報値を直近3カ年の3月31日現在の農産物検査の進捗率により確定値見合いに推計したもの。
注2：ラウンドの関係で計と内訳が一致しない場合がある。

令和6年産酒造好適米の主要銘柄の生産状況

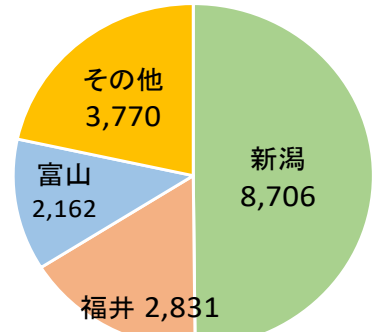
【山田錦】



(単位:トン)

	6年産	シェア
兵庫	18,356	54%
岡山	3,402	10%
山口	2,496	7%
その他	9,698	29%

【五百万石】



(単位:トン)

	6年産	シェア
新潟	8,706	50%
福井	2,831	16%
富山	2,162	12%
その他	3,770	22%

資料：「農産物検査結果」（農林水産省）
注：令和7年3月31日現在の速報値を直近3カ年の3月31日現在の農産物検査の進捗率により確定値見合いに推計したもの。

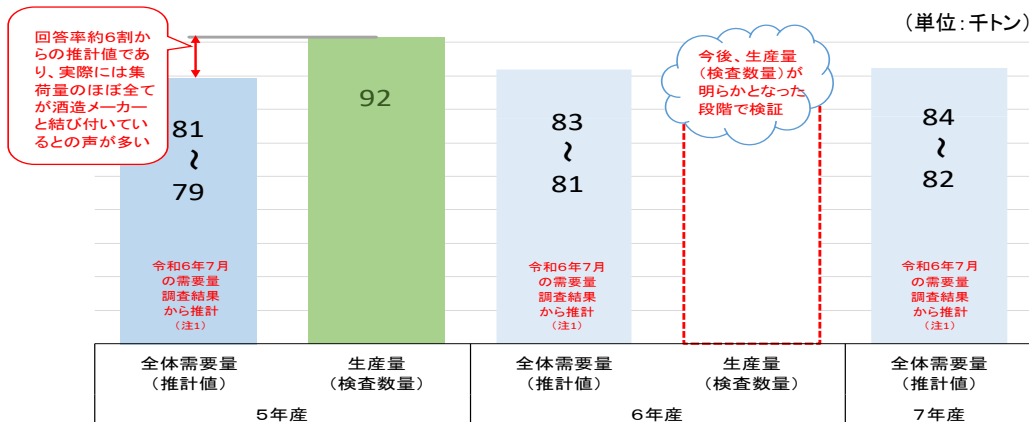
7 酒造好適米の需要に応じた生産について

- 酒造好適米の需要に応じた生産に向けて、生産及び実需の関係者による「日本酒原料米の安定取引に向けた情報交換会」を毎年開催するとともに、需要に応じた生産を行うための指標として、平成28年度から全酒造メーカーを対象とした酒造好適米等の需要量調査を実施。
- 令和6年7月に実施した需要量調査によると、酒造好適米では、令和5年産の全体需要量（推計値）は79～81千トン程度、令和6年産の全体需要量（推計値）は81～83千トン程度、令和7年産の全体需要量（推計値）は82～84千トン程度と見込まれる。
- 令和5年産については、生産量が全体需要量（推計値）を11～13千トン程度上回っているものの、生産及び実需の関係者からは、実際には集荷量のほぼ全てが酒造メーカーと結び付いており、過剰感はないとの声が多く、その差は全体需要量を聞き取り結果（回答率約6割）から推計していることによるものと考えられる。
- 令和7年産については、各産地において、今後、全体需要量の変動する場合があることに留意するとともに、令和6年産の生産動向及び酒造メーカーからの最新の需要動向等を踏まえ、引き続き需要に応じた生産に取り組むことが重要。

調査の実施状況

	令和6年度
調査期間	令和6年7月
調査対象	酒造メーカー 1,205社
回答数	711社
回答率 (数量ベース)	81～83%

酒造好適米の全体需給状況の見通し（推計）



注1: 各年産の全体需要量(推計値)は、令和6年7月に実施した需要量調査の数量ベース回答率が、令和4年産酒造好適米の全体需要量(73～74千トン)と当該調査の令和4年産の需要量(約60千トン)から約81～83%と推計されるため、各年産の調査結果の需要量を当該割合で除することにより算出。

注2: 生産量は、農産物検査数量(醸造用玄米)の値。